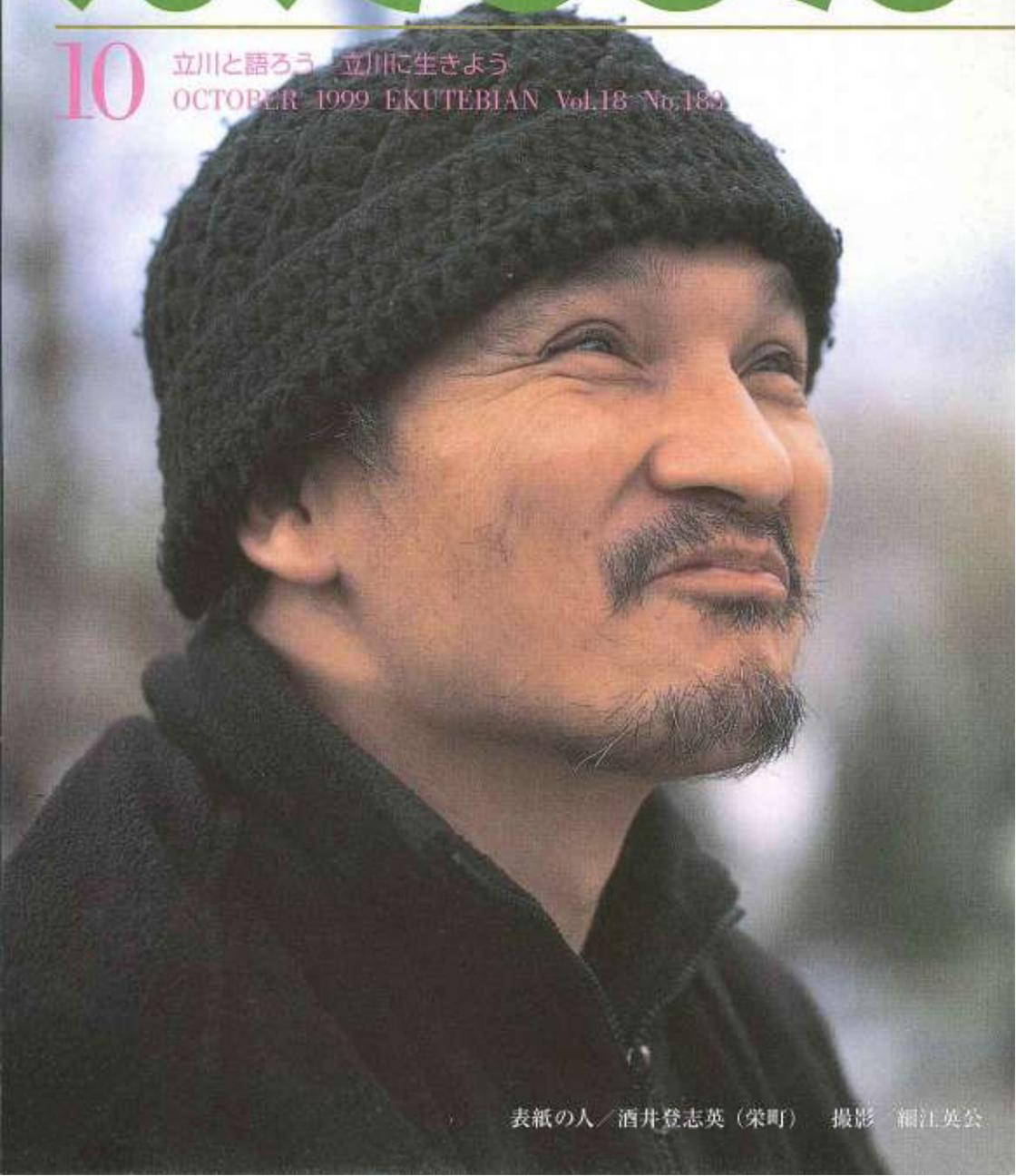
えくてびあん

10
立川と語ろう　立川に生きよう
OCTOBER 1999 EKUTEBIAN Vol.18 No.189

表紙の人／酒井登志英（栄町）　撮影　細江英公

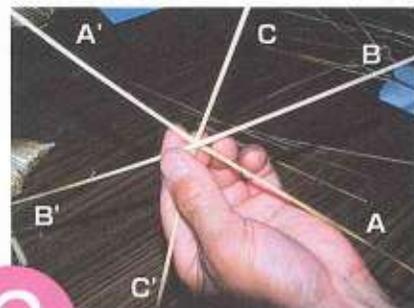
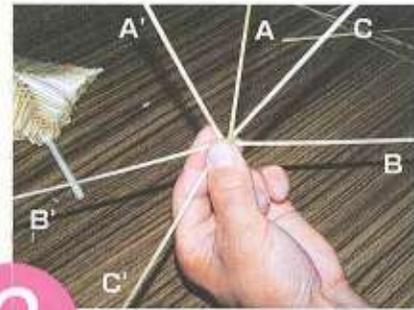
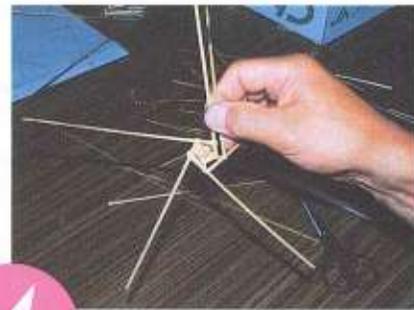
くらふと画報 ⑨ 協力：立川市クラフト同好会

麦藁の虫カゴ

藁かごの主を囲んで夜長かな

マツムシ、スズムシ、コオロギ…。彼らの季節がやってきた。秋の夜長、虫たちの声を愉しむのにぴったりの「カゴ」を紹介しよう。材料は麦ワラのみ。最初ややこしく感じるが、基本的な編み方さえマスターしてしまえば、大きさや形に凝ることもできる。フタをつけたり、持ち手をつけることも可能だ。「昔は立川のこどもはみんな作ったもんです。虫カゴだけでなく、いろいろなものを作って遊びましたよ」（鈴木さん）。自分でこしらえたカゴに虫を入れ、鳴き声をバックに月を眺める。贅沢な時間を過ごせそうだ。

今月の先生
鈴木 功さん（富士見町）

1 麦ワラは摘み取ってから一晩、水に浸しておく。水分を含んだワラはしなり易く、割れにくい。

2 3本のワラを中央で重ね持つ。親指で中央を固定し、まずAのワラをCとA'の間の方向に折り曲げる。

3 A以外のワラで星形になるように位置を整える。次にBをCにからめてAとの間に折り曲げる。

4 3の作業を順々にくりかえすと、写真のように五角形が出来上がる。カゴの基本の形だ。

5 作業を続けていくうちにワラが短くなったら、新しいワラを継ぎ足す。太さを見て差し込めばＯＫ。

6 折り曲げ方の角度で、カゴ全体の大きさが変わる。角度を大きくとると、ゆったりしたカゴができる。

生徒の感性に敵わないところ、たくさんあります。

昭和第一学園高校・機械研究部顧問 新屋敷誠さん

啓介 なんでも昭和一高（昭和第一学園高校）の機械研究部では、省エネカーだけじゃなく、また新しいクルマの開発を始めたそうですね。

新屋敷 ソーラーカーのことですね。太陽電池で動くクルマなんですよ。部としてはまだ取り組み始めたばかりで、七月の終わりに秋田で開かれたレースに初めてエントリーしました。

啓介 ほう、結果はどうだったんですか。

新屋敷 残念ながら完敗でした。駆動系のトラブルが続いて。でもいい勉強になりました。

啓介 じゃあ、ソーラーカーはこれからまた楽しみですね。省エネカーで日本一になったのは、一昨年でしたっけ。

新屋敷 ええ、そうです。毎年、鈴鹿サーキットで行われる『マイレッジ・マラソン』という世界共通規格の大会で、一位・二位を独占しました。

■新屋敷誠（しんやしきまこと）／たった1リットルの燃料で何キロ走れるか。いわゆる"省エネカー"の製作に8年前から取り組む昭和第一学園（栄町）の機械研究部。一昨年の世界共通規格大会で全国優勝、今や出場すれば必ず入賞を果たす強豪となった。その少年エンジニアたちを束ねるのは、同校機械科で教鞭をとる新屋敷誠さん、38歳。創部以来の顧問で「技術者はあきらめない」が信条。その意を受けて同部は現在、省エネカーから一歩進んだ"ソーラーカー"の開発に挑戦している。
■立井啓介（たていけいすけ）／本誌編集人。

啓介 一リットルのガソリンでどれだけ距離を走れるかという競技だそうですが。

新屋敷 鈴鹿はコースに傾斜があるんです。およそ七〇〇キロ走りました。比較的平坦なレース場だと、その倍は走るんですよ。

啓介 エンジニアを目指す高校生たちにとっては、この大会はいわば「甲子園」のようなものだと聞いています。そうすると新屋敷先生は、甲子園の優勝監督のようなものですよね。

新屋敷 僕もよく生徒に「これはオレたちの甲子園なんだぞ」ってハッパをかける時があるんですが、「先生、そんなカッコいいもんじゃないよ」なんて云われたりして（笑）。でも僕も生徒と一緒になって、愉しんでいる部分が大きいんですよ。

啓介 甲子園の優勝監督も、よくそんなこと云いますよ。「全員野球だ」とか云って。でも、チームとして監督の存在はやっぱり大きいでしょう。西武の松坂投手だって横浜高校の野球部で監督に育てられたわけですから。

新屋敷 いや、僕はフィフティ・フィフティだと思ってるんですね。どちらか一方が欠けてはいけない。ウチの場合、生徒と意見が対立すると、もうケンカ状態ですから。

啓介 え、ケンカしちゃうんですか。

新屋敷 大会前になるとしょっちゅうですよ（笑）。「オマエら間違ってる」、「いや先生、オレはこう思う」なんて本気になってやり合ってるんです。

啓介 それは技術的な問題で？

新屋敷 そうですね。技術論、エンジニアとしての議論です。実際これまでも、僕の指導した方法よりも生徒の発案の方がいい結果を出したというケースが、何度となくあるんですよ。モノづくりに対する発想においては、我々なんかよりもレベルが高い子が多い。「敵わねえな」と思うことも度々です。

啓介 でも、たとえ教師にぶつかる生徒はいたとしても、生徒と本気でケンカする先生なんて滅多にいないでしょう。

新屋敷 結局、目標があるからこそできることだと思うんですね。クルマの完成度を上げ、記録を上げ、そして優勝したいと。お互いに想いはそこにしかないわけですから、散々やり合ってもいったん決着してしまえば、しこりはまったく残らないですし。

啓介 僕の友人にも高校教師がいるんですが、彼の話を聞くと大変だなあと思うんです。学校の近くでは飲みにもいけない、パチンコやカラオケも愉しめない。生徒だけじゃなく親御さんの目もあるから、いろいろ気をつけなきゃいけないんだって。新屋敷先生にはそういうの、ありませんか

新屋敷 うーん、どうでしょう。まあ教師というものを「職業」として考えればそういうことはあるだろうけれど、制約というものはどんな仕事でもあることですし、大きく教育というものを見たときに、それは学校だけで片づけるものではないと思うんですよ。この機械研究部の活動に関して云えば、僕のベースにあるものは「オレはオマエらと愉しいことをしたい、オマエらもそうだろう。だったら一緒にやろう」ということなんですね。だから、一般論としての教師像からみれば、僕は教師失格でしょうね（笑）。

啓介 でも先生、実際やってて愉しいでしょう。何よりも、生徒と対等にケンカできるなんて嬉しいんじゃないですか。

新屋敷 ええ、手応えは本当に感じますね。僕は教師になる前は技術者として会社勤めをしていたんですが、そこで学んだのは「エンジニアはあきらめてはいけない」ということなんですね。失敗例や反省材料をしっかりふまえて、常に前向きに進歩を目指す。それが「技術屋魂」だと。技術職を目指す彼らにあえて教師らしいことを云うとすれば、結局その点だけなんです。

啓介 お話を伺っていると、イマドキの子にしては珍しく、ホネのある生徒が多いようですねえ。

新屋敷 実は今年は部員数が少ないんです。毎年、新入生が入ることは入るんですが、完成したクルマを見て、すぐにこれを作れると思ってしまうんですね。実際は毎日、油まみれで旋盤なんていう地味な作業の繰り返しですから、それに我慢できない子は残念ながらリタイヤします。今残っている部員は、それを乗り越えてますからね。

啓介 放課後からそれこそ深夜まで残って作業をしてるっていうんですから、ホントに好きな子じゃないと続かないでしょう。

新屋敷 ある生徒に「先生はいいよな、オレたちには三年間しかないから」と云われたことがあって。ちょっと切なくなりますね。

啓介 でも先生、この三年間の経験がその子の「糧」になるわけでしょう。現に今でも大会前になるとOB諸君が手伝いに来てくれるらしいじゃないですか。

新屋敷 ホント嬉しいんです。昼間一生懸命仕事して疲れてるにも関わらず、後輩のために駆けつけてくる。それは本当に有り難いですね。

啓介 監督する先生の力と生徒個人の力、あと重要なのはそれをサポートする学校の力というものもあるでしょう。

新屋敷 理解のある学校だとは本当に思います。他の学校ですと、僕らのような活動自体が禁止されているところもあるんです。ウチは全くそんなことありませんし、逆に応援してくれてますから。

啓介 昭和一高という学校は面白いなあといつも思うんです。機械研究部もさることながら、例えば真鍋霊彦先生（御歳六七歳のマスターズ・ランナー）のような先生もいる。佐藤多持先生（画家）は昭和一高の教師時代、あの戒厳令の戦時下でスケッチを描いてた。何か伝統的にユニークな先生が集まる校風のようなものがあるんじゃないですか。

新屋敷 詳しいことは学校長に聞いてみないと（笑）。でもウチはいわゆる進学校ではないですから大らかな部分があって、「やろう」と思う気持ちがあればできるだけバックアップしてくれるんです。

啓介 それ、大事だと思うんです。教育には「幅」ってもんがあるでしょう。とりあえず大学行って、テキトーに就職してって子に比べたら、機械研究部の子たちからは生き生きとした目的意識なようなものが感じられる。それはやっぱり、先生方が「幅」を持っているからだと思うんですよ。

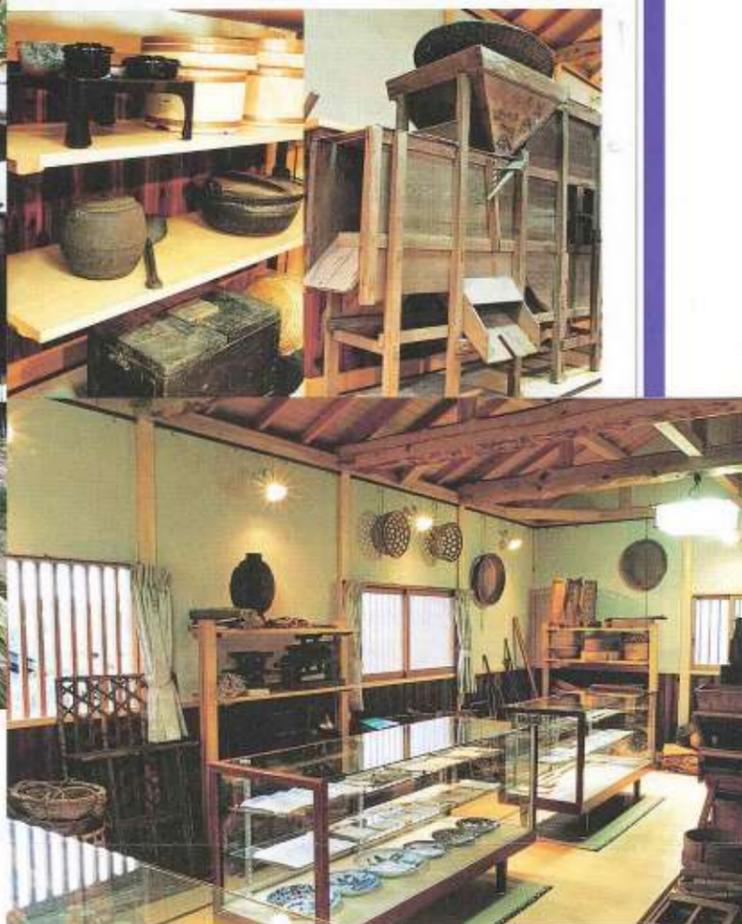
新屋敷 たとえば偏差値というのはもちろん大切ですけれども、評価の切り口がそれだけというのは、個人的には寂しいですね。僕自身も生徒から学ぶことはたくさんありますし、生徒とは「可能性を追求する仲間」でいたいと思うんです。まあ僕自身、学生時代は出来の悪い生徒でしたから、教師らしいことを云っても全然説得力がないんですが（笑）。

啓介 そこがいいんじゃないですか。新屋敷先生がもし「優秀」だったら、機械研究部は日本一にはなってませんよ（笑）。

資料館「馬場」完成。そして次の夢へ

わが街屈指の旧家、高島家（柴崎町1丁目）。現当主の高島豊さん（67）は、自宅敷地内に“私設資料館”を建設した。その名も「馬場（ばんば）」。

二階建ての館内には、代々農業を営んできた高島家が実際に使用してきた農機具や古銭などが展示されている。それを“私物”に終わらせることなく、郷土資料として残すこと。先祖への供養と、地域の人々への感謝を現すという、高島さんの積年の夢の形がここにある。

しかしご本人曰く「これはひとつの通過点」。立川に生まれ育った愛着の表現、その信条は“相利共生”。地域のために新たな夢を掲げ、実践に向かおうとする覚悟、その想いは「この地に骨を埋めるまで」持ち続けると。

●古銭や証文類。農業を主とし、様々な仕事を営んだ高島家の歴史が垣間見える。明治の中頃まで立川の本村は東京ではなかったため、地券の表記も「神奈川県」となっている。

●「信用金庫法」が施行され、信用組合から生まれ変わった直後の“たましん”のカレンダー。高島さんは平成元年までたましんに勤務。地域の振興を見つめ続けた。

讀賣新聞 號外

二二六事件軍法會議の斷罪

叛亂軍の香田元大尉以下

十七名死刑の判決

無期禁錮五名 有期五十四名

●“近衛兵”として尽力した高島さんのご尊父が残したと思われる「2.26事件」を報じた新聞。今年の夏、蔵の整理をしているときに発見された。

◆ 高島 豊さん ◆

ゴロさんの独断毒語 ③

捨扇（すてあふぎ）

今年は殊更に残暑の厳しい年でした。私はいつの頃からか扇子の愛用者となり、今年の夏は必携のものでしたが、九月にはいっても半ば頃までは使っておりました。扇子の風というものは、冷房機からくる風とはまた別の心地良さがあるものです。

扇子をよく携帯するようになったのは、ある時、高橋美智子さん（栄町）から何かの御礼だといって、ご自分で描かれた絵を添えて下さったのがはじめのように記憶しております。高橋さんはいわゆる「画家」ではありませんが、その腕前は一流で、方々の展覧会で入賞しておられる。その方が描いてくださった扇子ですから大切に使っておりましたが、ある時、俳句作家から「捨扇（すてあふぎ）」という言葉があると教わったのです。

早とちりでは名高い私のこと、扇子というものは一年使ったら捨てるのが「扇子界」の常道なのかと思い、そのことを美智子さんに、あるパーティーの席で無遠慮にも申し上げたのでした。捨扇は一名「古扇」ともいう。これは何年も使って古くなりボロボロになったそれを指すのではなく、一夏きりのもので、秋を迎えたらもうそれは「古扇」であり、冬を越すまで持ち続けるものではない、などと知ったかぶりをしてしまったのです。そうしたら、どうでしょう。美智子さんは泰然として、——それでしたら私、毎年、違う絵を描いて新しいのを差し上げますわ。

と、こうおっしゃる。以来、もう七年か八年、五月の下旬になると花や鳥を描いた真新しい扇子が送られてくるのです。そこらに売っている扇子とはわけが違うとばかり、私は内心、得意満面なのでした。美智子さんにはしばらくお会いしておりませんが、扇子が届くと、あ、お元気なのだなあと安堵の胸をなでおろします。

ところが、最近わかったことなのですが、秋扇、捨扇などの言葉は、もう涼しくなってもまだ仕舞い忘れて置いてある扇のことをいうのであって、季節はずれの侘しさをいっているのだそうです。「忘れ扇」ともいい、秋を強く意識している表現だそうです。扇がそぐわなくなった季節をいっているのであって、誰も「捨てろ」とは云っていない。

私はなんという勘違いをしてきたものかと反省しきりなのですが、生まれつきの早とちり、直しようもありません。

美智子さんにこのことをお話しして、来年からはお送り下さらなくても結構です、今年の扇子はまだそんなに傷んでおりませんので、それを使わせて頂きます、と申し上げようかと思っているところなのですが、彼女が描いてくださる絵が毎年素敵なので。やはり来年の初夏も新しい扇子が欲しいという気持ちが強いのです。

強欲というものでしょうか、今年の扇子を捨てたものかどうか。

（やまだごらう・詩人）

イラスト 綾 幸子

連載 四字熟語（26）

時雨之化（じうのか）

師の教育がほどよく行なわれ、広がっていることのたとえ。恩恵のあまねく及ぶこと。転じて、師の恩を指す。

時雨は、日本では「しぐれ」と呼ばれ、晩秋から初冬にかけての晴れたり降ったりする雨のことをいうが、本来は、ほどよい時に降る雨の意。それが、自然に草木を育てるように、君子の教えが適宜に施され、人々の啓発に役立つことをいう。

表紙の人 **酒井登志英さん**（栄町）

酒井登志英さんが蕎麦店『信更』をはじめて18年になる。蕎麦のほかにも肴が豊富で、お客の中には「芸術家」が多い。それもそのはずで、酒井さんは「多摩美」はグラフィックデザイン科の出身なのである。決して大きな店とは云えないが、壁面には美術作品がしばしば並ぶ。無料で貸している「プティ・ギャラリー」としてすっかり定着した。店主のキャラクターだろうか、時に店内が騒然として談論風発、芸術論に花を咲かせることがある。25年生まれ、まだ49歳。もうひと花咲かせるか。

（於・栄緑道／撮影・細江英公）

東風

昭和第一学園高校の新屋敷先生との対談は、教育者の本質に触れる部分がそちこちに感じられて、快適に進められた。生徒を上から見下ろして「教育」するのではなく、目線が生徒と平行なことが特徴的であった◆誰でもが「教師像」をその人なりに持っているであろう。その大半は「四角四面」なのではないだろうか。悪いことはしない、正義の固まりのような型。そうでもしないと「教育」はつとまらないと考えられている。ある友人の高校教師が云っていたことがある。学校の近くでは酒場にも入れないし、パチンコも出来ない。もし生徒に見られたら立場がないし、親御さんに出合ってもバツがわるいものだと。新屋敷先生にもそういう気持ちが全く働かないといったらウソになるだろうが、枠を越えて、機械研究部の生徒と一緒に油まみれになってソーラーカーを造り、省エネカーの開発に熱中する。つまり、生徒よりもわずかに経験を積んだ先輩として共に在ろうとする◆発想力として、しばしば生徒に敵わない場合があるという。機械研究部の「兄貴分」、それで良しとしているところがある。今年も夏休みはほとんどなかった。教育は「労働」に換算できるものではないことを眼前に見た◆えくてびあん　大地を走れ　秋風に

【第二次えくてびあん同人】
編　集　新井紀美子／大久保清志／小林康史／空谷 空／山田五郎
デザイン　池田隆男／AMNET DF
写　真　中村 伴／五来孝平

えくてびあん 10月号
第18巻　通巻183号
平成11年10月1日発行
発　行　えくてびあん編集工房
〒190-0012
東京都立川市曙町2-17-5 杉田ビル3F
TEL. 042-528-0082 FAX. 042-528-0065
編集人　立井啓介
発行人　名尾居真
印　刷　(株)大廣社

第1回えくてびあん杯争奪

立川べーごま選手権

竹内洋介選手 蕎麦『無庵』店主　**第1回戦C組**　**鈴木英次郎選手** 画廊『ぎゃらりー繭』オーナー

早くも優勝候補同士の争い。軍配は竹内選手に

片や曙町、北口に名店の誉れ高い蕎麦処『無庵』の竹内洋介選手。片や西砂文化の発信地として知られる『ぎゃらりー繭』のオーナー、鈴木英次郎選手。両者ともベーゴマ、メンコ、ビー玉の“三種の神器”において、それぞれに思い入れ深い強豪同士。試合前から既に両者は臨戦態勢、どちらが勝ってもおかしくない状況で対戦は始まった。トコ上で唸りをあげるのは竹内選手のコマ。抜群の安定感。対する鈴木選手、気負いすぎたのかスピードはあるものの安定感に欠ける。結果、鈴木選手のコマを一個一個確実にはじき飛ばした竹内選手の勝利。終了後もなかなかコマを手離さない二人、反省会と称し、再試合（非公認）を始めてしまった。

真味百撰 ㉚

カフェ シャベリタリーナ

柏町3-2-48中村ビルB1F / 535-6602
11:00～21:00 / 木曜定休

砂川のがんばる奥さま御用達 手作りメニューとケーキで ホッと一息「おシャベリ」タイム

栄町にお住いの大川順子さんが『シャベリタリーナ』を開いたのは2年前。それまで一人の主婦に過ぎなかった順子さんが自分の店を持とうと決心した背景には、父親の介護経験がある。「実家で一人暮らしをしていた父が倒れ、私が世話をすることになったんです。亡くなるまで1年ほどつきっきりだったんですが、父はボケが進んでしまって、私も精神的に参っていました」。その順子さんを支えたのは、日に一度、近所の喫茶店を訪れること。連日通ううちに知り合いもでき“愉しくお喋りする”ことの大切さを痛感したという。その後、順子さんは一念発起。家族の猛反対にあいながらも、使命感のようなものがあったという。「主婦にもストレスはある。気楽にお喋りすることでそれを解消する、そんな場が必要だと思ったんです」。日常からちょっと抜け出せる雰囲気作りのために、店内は程良いセンスで統一。メニューは全て手作り。当初反対していた家族も今では応援にまわり、長女の美織さんも連日母を手伝う。ちなみにケーキづくりはすべて美織さんの担当だ。「お喋りしたくなったら来てもらう。店名の由来も云わずもがなです」。月に一度開くコンサートも好評だ。

下ごしらえから全て手作りなので、メニュー数は少ないが、なんとも優しい味わいは正に“おふくろの味”。写真は「オムライス」（サラダ付・700円）。

赤川作品十二撰 3

「裸足の少年」

埼玉県宮代町

埼玉県の北東部に位置する町、宮代町からの依頼でつくったものです。町立図書館の正門部に設置されています。

青空の下で靴を脱ぎ、ゴロンと寝っころがっている少年は本を読んでいます。何かの図鑑でしょうか。はたまた冒険小説でしょうか。ひょっとしてマンガかな?

陽の光を浴び、寝そべりながらする読書が大好きでした。夢中になっていると、いつの間にか本の角にトンボがとまっていたりして。壁に囲まれた部屋の中で、机に向かってお行儀良く読むよりも、野外の読書は「生きた知識」を得られた感じがしたのです。

このワクワク感を、図書館に集まる少年少女にも分けてあげよう、そんな想いを込めてつくりました。

（1993年制作・赤川政由）